

くらし

# 夢再び

## モンゴル恐竜調査隊

石垣 忍

20年余り前も現在も、ゴビ砂漠恐竜調査生活で変わらないのは「水の貴重さ」である。

今年の調査では約1トの水をウランバートルから運び、普段の調理用の水はそれを使い続けた。隊員が持ち歩く飲料水は市販のミネラルウォーターを持って行った。食器洗いや洗濯に使う水は15分ほど離れた井戸まで時々水をくみに行き、200リットルずつ持ち帰って使った。水くみ作業はできるだけ回数減らしたい嫌な仕事だ。だからみんな節水が板についている。手洗い・洗顔・歯磨きは合わせてコップ1杯で済ませる。洗髪等もほとんどしない。調査期間中のシャワーはない。時々濡れたタオルで体を拭くぐらいである。それでも平気なのは空気が乾燥しているからだろう。

しかしさすがに下着の替えがなくなり調査着が汚れてくると洗濯をする。だいたい1週間に1回ぐらいは洗濯する。ただし1回の洗濯で使える水は、洗いもすすぎも合わせて1人約10リットルである。私は20年前にモンゴル人から10リットルで下着一式と調査ズボン洗濯してすぐ方法を習った。伝授されたコッ

## ⑥ 節水、節水、節水

は、すすぎの前には徹底的に絞るところと、すすぎのあと石鹸分が残っても気にしないことである。こうして隊員は「気にしない」ことを身に付けて10リットル洗濯ができるようになる。

気にしないと言えば、ゴビの生活をするといろんなことが気にならなくなる。と言うか気にしていたら神経が持たないので気にしなくなる。たとえば「小や大」のトイレを適当に隠れてすること、衣類やテントが砂だらけになること、小虫や砂が料理に入ること、タオルと雑巾の曖昧化などもだんだん気にしなくなる。

衛生と健康には気をつけねばならない。それは隊員の基本的な義務である。しかし気にし過ぎててもゴビ生活に適應できない。「まあそんなことがあるから」ぐらいがちょうどよい。

現在のような超清潔環境で人間が暮らして始めてからまだ数十年しかたっていない。私たちが本来持っている野性の感覚が、そんな短期間で衰えることはないだろう。ゴビの生活はそういう野性の感覚を呼び覚ましてくれるように思う。

ただ、調査が終わり、文明社会に戻ったら、この神経はリセットが必要になるように思う。

# 洗髪、シャワーなし

なる。そのリセットが不十分な私は、よく家人とトラブルになる。

「たいしたことないじゃないか。ゴビ砂漠ではなあ……」  
「うんは日本です」  
と。



調査隊の大型トラックは、荷物を下ろすと荷台が台所になる。奥の大きなタンクは900リットル入りの飲料水タンク。これで料理の水をまかなう。

これは私が悪い。公の場で野性の感覚に基づく無神経さが出ないことをひたすら願っている。  
(岡山理科大教授)

■ 随時掲載